

洗礼、霊と理性との調和

牧師 山本 護



芽吹きにはまだ早く、木々の間に南アルプスが眺められます。夕方、集会所でぼんやりしていると扉窓が甲斐駒ヶ岳の額縁になっている。かつて修験者が命がけで登り、命を充溢させた花崗岩の御神体。その山頂に天と地の結び目を幻視していたのでしょうか。

串田孫一(1915～2005)は自著「山のパンセ(岩波文庫)」にこんな一文を書いています。「山々のあいだを流れる大気が、自分の想念を運び、また自分の想念は大気の一部のような気さえするのだった。～私はやはりどれほど高く立っていても地上を離れず、その一步一步は、からみついた雑多の想いを運ぶ足を動かすにすぎないのである」。

串田はそうした山の空気を浴びる肌の感触について、「洗礼と呼んでみたこともある。孤独な、密やかな全く非宗教的な洗礼を、私は山へ登って行い」と記しています。険しい山で神的存在に近づこうとする修験者の肌感覚に共鳴しながらも、その一方で「それは殆ど不可能な融合であって～どれほど高く立っていても地上を離れず」と冷静に自覚している。この串田の正確な感覚描写がパウロの言葉と重なります。

「わたしが異言で祈る場合、それはわたしの霊が祈っているのだが、理性は実を結ばない。では、どうしたらよいのか。霊で祈り、理性でも祈ることにしよう。霊で賛美し、理性でも賛美することにしよう(1コリント 14:14～15)」。

すなわち、霊と理性との、相反するかと思えるものの調和。霊がおろそかになれば信仰は干からびて痩せ、理性が欠ければ信仰は陶酔的な手前味噌(人間が神を操作するような)に傾きます。ですから私たちの信仰生活が瑞々しくあるためには、パウロが語るように「霊で賛美し、理性でも賛美する」絶妙な調和が必要なのでしょう。

山での「洗礼感覚」について串田は次のように自戒し、また読者への警告としています。「むしろ今恐れるのは、山へ独りで来て、異常な心情を創り出してしまうことである。異常な状態が私に洗礼の感じを与えるにすぎないのであったら、どれほど過去や、また現在が重たく苦しくても、それを投げ出してしまうことは控えなければならない」。

串田が言う「洗礼の感じ」だけでなく、「本物の洗礼」においてもこれは同じ。洗礼は重く苦しい過去や今の現実を放棄することではありません。むしろそれらを積極的に、重たく苦しいまま負っていくこと。洗礼とは、霊で祈り、理性で祈る日々、重かろうが自分の十字架は負いうる(マルコ 8:34)、というキリストとの約束の徴ではないでしょうか。Ω